

2012年 3月 1日 Vol.0046

溝口敦氏の連載「人生の失敗」に迎えられて②

■テレビで裏ガネ問題を話す直前に逮捕される。■

ここで疑問がわく。三井さんはなぜ内部告発に踏み切ったのか。彼は88～91年まで高知の次席検事をつとめたが、このとき検察庁の調査活動費が幹部の遊興費に使われている事実を始めて知った。調査活動費が最大だったのは98年で、検察全体で5億5000万円。その後2000年度2億1500万円、08年度7500万円と減少してきたという。

三井さんが匿名を条件に告発に踏み切ったのは01年1月発売の雑誌『噂の真相』の記事が最初だった。大阪地検の加納駿亮検事正が高知地検検事正時代に調査活動費を不正に流用し、遊興費に当てていたという内容だ。調査活動費は中小の地検で年間400万円、東京地検で3000万円、大阪地検で2000万円が平均だったという。

最初は恨みを晴らすという私憤に発していた。三井さんは加納氏と事件処理をめぐって意見が対立し、その後、加納氏のせいで人事において不利な扱いを受けた、そういう加納氏が順調に昇進の道を歩むのは許せないと思ったのだ。

三井：

だけど01年11月以降、私憤はどうでもよくなった。公憤に切り替わったんです。当時「週刊文春」と『週刊朝日』が私からの情報に基いて大々的に報道してました。その報道が、一気にほかのマスコミにも波及しかねないような状況だった。他方、法務省は、加納駿亮検事正を福岡高検の検事長にすると上申したんです。森山（真弓）法務大臣は、加納検事正が裏ガネづくりで刑事告発されておったんで難色を示し、なかなか内示が出なかった。そこで当時の検察幹部は「けもの道」に踏み切ったわけ。最悪の選択です。

というのは、検察幹部らが麴町の後藤田正晴（元自民党衆議院議員、故人）

事務所を訪ねて、このままでは検察が潰れると泣きを入れたというんです。後藤田さんはこれを「けもの道」と名づけた。当時は小泉内閣でしたが、結局、加納検事正に対する刑事告発は「嫌疑なし」で済まされた。検察内部で裏ガネ使いは周知の事実だったけど、それを真っ白にしてしまった。それが1点と、検察が「けもの道」つまり政権を利用した。

法務・検察は内閣に大きな借りができたわけで、貸し借りの関係ができれば、もう時の政権に対する捜査はできません。こうしたことを聞いて、私は現職のまま実名で裏ガネづくりを公表しようと決断した。「けもの道」以後は、義憤からあらゆるマスコミと接触して、02年4月19日の金曜日に「告発スケジュール」が出来上がった。

内容は、朝日新聞東京本社版が一面トップで報道して、社会面では私が1問1答形式で答える。それをもとに民主党の菅直人さんが法務委員会で追及する。追求の過程で私を国会に参考人招致。裏金問題を証言し、国会内で記者会見して、その後、私が検事のバッジを外すというものです。それで、22日の月曜日昼に「ザ・スクープ」というテレビ番組で、キャスターの鳥越俊太郎さんを相手に私が答える形で収録を行なう予定だった。ところがその直前に私が逮捕されたというわけです。

—検察庁はKGBやCIAも真っ青の、思い切った弾圧を加えるものだ。三井さんは組織の裏切り者とされた。

三井：

組織として裏ガネづくりの維持と、自らの保身からですよ。仮にこれが公表されていたら、検事総長以下約70名の検察幹部が懲戒免職になる。国民からも刑事告発される。使った金は返還せないけません。現職だけじゃなしに裏ガネを使ったOBにも及びます。そんなことになれば、検察機能は一時麻痺します。そういう状況を回避するために私を逮捕したわけです。

—三井さん自身、裏ガネとの関わりはどうだったのか。返せといわれたら、返すのか。

三井：

そら、返しますよ。高知地検での次席検事時代が3年、高松地検で3年、通算6年間、私は裏ガネの帳簿の決済をしてきた。検事正にお供して接待もしてきた。だから刑法でいうたら共犯者です。高知、高松とも調活予算は年間400万くらいですが、全部裏へ回って、遊興、飲食、接待、ゴルフ、麻雀などに消えています。

それは検事正の一身専属で出るもので、次席検事は使えない。例えば職員が亡くなったり、結婚したりします。検事正の場合は裏ガネから包みます。次席検事は自分の財布のおカネから包む。調査活動費は次席検事も事務局長も使えない。年間400万円を検事正一人が使うんです。1ヶ月に換算したら35万円程度。自分の給料以外に35万円あったら、飲み食いも、昼飯代も十分いけます。給料は全部余りますよ。

—接待交際費が必要なら予算化して正々堂々と使えという論がある。インチキ領収書をでっち上げて調査活動費を流用するような姑息なマネはするな、と。

三井：

いや、予算化するといっても、多くが遊興飲食、ゴルフ、観光、麻雀という類ですよ。こんなものは予算化できない。つまり調査活動費という原資をなくして、自腹を切ればいいんです。上司が部下を連れて行って飲食する。それを上司が自腹で払う。どこの会社でもやってることじゃないですか。要らないものはなくす。調活費はもともと税金だから、二次会で40万も使うというでたらめがまかり通る。

なるほど。役人の乱費は全て血税の乱費なのだから、民間企業の乱費とはもともと出どころが違う。心して勤儉節約に努めるのは公僕の義務であり、調活費の乱費など論外なのだ。

■今後のテーマは裏ガネと取調べ等の可視化。■

—三井さんの今後はどのようなものか。検察には煮え湯を飲まされた。リ

ベンジしなければならない。

三井：

裏ガネ問題は検察庁の幹部に頭を下げさせ、使った金を国に返させる。それが目的です。私の活動は東京じゃないとできない。東京にはいろいろな団体があるし、出版社も東京ばかりやから、関西じゃ全然できない。家族の住まいは関西だけど東京に支援者もいて拠点も設けられた。なので平日は東京で活動を始めてます。

—今後の見通しはどうか。検察庁が裏ガネ問題で国民に謝罪する見込みはあるのか。

三井：

一番簡単なのは、千葉景子法務大臣が指揮権を発動する。これで法務省、検察庁が国民に謝罪して使った金を返す。そうしたらすぐ済む話です。私は塀の中から提案しとるんだけど今のところなかなかようやれん。これは行政上の指揮権発動であって、捜査上の指揮権発動じゃない。だから全く問題ないんです

—冤罪を防ぐ趣旨から取り調べの様態を録音・録画する「可視化」が主張されている。可視化すべきは単に取り調べの様態ばかりか、法務・検察の会計についても可視化、透明化すべきだろう。

三井：

取り調べの可視化だけじゃだめ。押収証拠品の目録と残記録（検事が公判で論告した残りの記録）の開示もしないと。つまり、自分達にとって都合の悪い証拠や記録を検察側は押収しても、一切裁判には出さない。だから、証拠等の全面開示がないと冤罪はなくなる。今まで、例えば死刑判決が後に無罪になったような事件では、検察側の証拠隠しが暴かれたケースが多いんですよ。だから取調べを可視化するだけでなく、押収品目録と残記録の全面開示をセットした法律が必要なんです。

それと検察制度も、裁判制度もアメリカの制度を参考にして、もう一遍、基

本的に作り直さないかと私は思うんですよ。民意反映するならアメリカの制度がいい。裁判官も検事も選挙で選ぶ。選挙が一番民意を反映します。

三井さんは拘置所や刑務所の塀の内側でたっぷり法務行政や司法制度について考えをめぐらしたに違いない。現場も知悉（ちしつ）し、主張することは流石に説得力がある。

しかし、三井さんの変転を見るにつけ、内部告発は割に合わないと思う。偽装食肉のミートホープ事件で内部告発した会社幹部は「告発して私にいいことは何もなかった」と述懐している。

三井：

告発した人は誰でもそうですよ。雪印食品の牛肉偽装を告発した西宮冷蔵の水谷洋一社長にしても、告発したおかげで会社は休業になってしまった。いいことは何もありません。

だが、ばい菌を殺すには日にさらすのが一番とアメリカの司法関係者が言っている。事実の暴露が国民の利益につながる。現に三井さんの告発もあって検察庁の調活費はすでに最盛期の1割5分程度まで減額された。検察幹部は頬かぶりでやり過ごしたが、それでも三井さんの告発はじわじわ効いている。我々は告発に踏み切った人を大事にすべきだろう。少なくとも「裏切り」などと前時代の村人の陰口は繰り返さない。組織に対して後ろ足で砂を引っ掛ける。大いに結構ではないか。

(2010 通販生活夏号 溝口敦氏 取材より 終わり)

---

著者：三井環（元大阪高検公安部長）